

國學院大學學術情報リポジトリ

社会福祉施設での保育実習を通した学生の成果と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣井, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001393

社会福祉施設での保育実習を通した 学生の成果と課題

廣井 雄一

【要旨】

本研究の目的は社会福祉施設での保育実習によって、学生がどのようなことを成果と課題とし実感しているのかを明らかにすることである。学生の実習後のレポートの「成果と課題」に関する記述をKH Coderによって分析を行った。結果から、実習の成果は、①生活環境への配慮に関する内容、②連携した支援に関する内容、③事前のイメージと実際との違いに関する内容、④保育士の役割に関する内容、⑤コミュニケーションに関する内容、⑥信頼関係に関する内容、⑦安心に関する内容、⑧家庭に関する内容、⑨時間に関する内容、⑩多様な入所者や職種に関する内容であった。実習の課題は、①実習生自身の保育観に関する内容、②積極的な姿勢に関する内容、③利用児者との距離感に関する内容、④利用児者への対応に関する内容、⑤視野に関する内容、⑥発達の知識に関する内容、⑦コミュニケーションに関する内容であることが明らかとなった。一方、専門的な支援技術や計画に関する内容が見られず、それらを意識した実習指導の必要性が示唆された。

【キーワード】

社会福祉施設 保育実習 成果と課題 テキストマイニング

I. はじめに

保育士養成施設を卒業した資格取得者の卒業後の進路としては、「保育所及び幼保連携型認定こども園」が55.0%、「地域型保育事業」が0.7%、「幼稚園」が18.6%とあり、約75%が就学前の子どもに関する保育・幼児教育に関する仕事に就いている。一方で、その他の福祉施設（乳児院や児童養護施設等）に就職する学生は9.6%と全体に占める割合が少ない（山崎、2017）。しかし、筆者が担当する保育実習Ⅲでは就職を見据えて履修する学生が増えている。

保育士資格については、保育所保育士と施設で働く保育士の養成を分けて行うこと（圓入、2007）や、4年制養成の中で各領域の専門性に関する学びを進化させることを意図した専門領域に応じた場での実習を行い養成することが構想されてきたが（大島、2009）、現在も保育士資格は単一の資格となっている。しかし、保育士が行う支援の場が多岐にわたり、それぞれの場で保育士としての専門性が発揮することを求められている現状を考えると、保育実習と事前事後指導の中での学生の学びのつながりや指導方法について検討する必要があると考えられる。

上述したことから、本研究では、保育実習のうち、社会福祉施設での実習を行う「保育実習Ⅰ

（施設）」、「保育実習Ⅲ」に注目する。これらの実習は、保育士資格取得希望の学生にとって保育所以外の社会福祉施設と関わる大切な機会であり、保育所での実習とは異なる学びがあると考えられる。そこで、保育所以外の社会福祉施設での実習体験となる「保育実習Ⅰ（施設）」、「保育実習Ⅲ」で学生がどのような学びを実感して、どのような課題を感じているのかを明らかにすることを目的とし、望ましい実習指導を検討する一助としたい。

Ⅱ. 調査概要

4年制の保育士養成施設A大学の学生のうち、保育実習の選択において、「保育実習Ⅰ（施設）」および「保育実習Ⅲ」を履修選択した学生を対象とし、2つの実習を終えた直近2年分とした。

1. 調査対象

A大学に在学し、保育士養成施設に指定されている学科所属で、「保育実習Ⅰ（施設）」および「保育実習Ⅲ」を履修した2015年度入学生9名、2016年度入学生26名の合計35名とした。

学生の保育実習履修の時期（表1）は以下の通りである。

実習施設の配当は、社会福祉施設の施設種別の希望と「保育実習Ⅱ」、「保育実習Ⅲ」の選択については2年次6月頃に学生への希望調査を行い、配当している。

表1. 保育実習実施の時期

【2015年度入学生】

時期	実習種別
3年次6月	保育実習Ⅰ（保育所）
3年次8月～9月頃	保育実習Ⅰ（施設）
3年次2月	保育実習Ⅱまたは保育実習Ⅲ

【2016年度入学生】

時期	実習種別
2年次2月	保育実習Ⅰ（保育所）
3年次8月～9月頃	保育実習Ⅰ（施設）
3年次11月	保育実習Ⅱまたは保育実習Ⅲ

2. 方法

「保育実習Ⅰ（施設）」と「保育実習Ⅲ」終了後のレポートの記載内容を分析対象とした。レポートの書式は、A4用紙1枚とし、記載項目は、「実習施設名」、「実習期間」、「実習施設の特色」、「成果と課題」の5項目を設け、「成果と課題」には成果と課題それぞれに1つ以上記載し、計5つ記入することとしている。これら記載項目のうち、「成果と課題」の記述の分析を行った。

分析については計量テキスト分析ソフト「KH Coder 3 AS Basic」を用いた。KH Coderは種

口（2014）によって、テキストデータを統計的に分析するためのフリーソフトで、アンケートの自由記述等の様々な社会調査データを分析するために開発されたものである。このソフトを利用した教職や看護、ソーシャルワーク、介護の各分野の実習生や実習指導者の記述を分析した研究がある（福田ら、2018；三浦ら、2017；鈴木ら、2015；高梨、2018）。保育実習に関する研究では、保育実習Ⅱを終えた学生の記述を分析した研究がある（加藤、2016）。このように多くの分野での実績があることから、本研究でもこのソフトを分析に使用する。

研究協力の同意を得た学生の実習事後レポートをスキャニングし、読み取ったテキストデータの文字化け等の修正を行い、文章の電子テキスト化（Excelファイル）を行った。その電子テキスト化した対象ファイルをKH Coderの前処理にて修正を行った。さらにデータの複合語の検出を行い、強制抽出語の処理を行った。

形態素解析を実施した後、レポートの中で多く出現した語がどのようなものであったか確認し、抽出された語同士がどのように似通った文脈で使われているかを確認し、成果と課題に記述されているものの概観を把握するために抽出語共起ネットワーク分析を行った。

3. 倫理的配慮

研究対象者に対して、口頭で研究の主旨の説明を行った。説明の際には、得られたデータは個人が特定されることはないこと、研究目的以外に使用しないこと、研究協力は強制ではないこと、協力の有無により不利益は生じないことを伝え、口頭での同意を得た。

Ⅲ. 結果と考察

1. 基本統計量

1) 実習施設の種別

実習施設の種別（表2）は以下の通りである。対象学生の実習先の施設種別は10種類であった。「保育実習Ⅰ（施設）」と「保育実習Ⅲ」について、同じ種別での配当は行っていない。

表2. 実習先施設の種別と実習生数 (人)

	保育実習Ⅰ（施設）	保育実習Ⅲ	計
乳児院	1	6	7
児童養護施設	4	17	21
母子生活支援施設	0	3	3
福祉型障害児入所施設	4	3	7
医療型障害児入所施設	3	0	3
児童発達支援センター	3	1	4
児童厚生施設	0	1	1
児童相談所一時保護施設	4	3	7
障害者支援施設（施設入所）	5	1	6
障害者支援施設（生活介護）	11	0	11
計	35	35	

2) 対象となった記述数

対象となる記述は、成果として挙げられた文章213記述、課題として挙げられた文章136記述で、合計349記述であった。

3) 総対象データ数と「成果と課題」の抽出語

形態素解析の結果、総抽出語は、42,658語である。そのうち、助詞や助動詞等一般的に用いられる語を除いた「使用語」は16,133語であった。分析対象とする「異なり語数」（何種類の語が含まれているかを示す数）は2,566語、そのうち2,184語が「使用語」であった。集計単位は段落単位では、349段落、文単位では1,335文であった。

2. 特徴語の抽出

次に、「成果と課題」のなかで使用されている言葉（語）の特徴をとらえるため、記述された内容（テキスト）を分析した。「成果と課題」に使用されている言葉（語）の名詞、サ変名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞可能を解析の対象とし、共起尺度の一つであるJaccard係数を用いて抽出した。表中の数値はそれぞれの語と「成果」と「課題」の関連をあらわすJaccardの類似性測度で、この数値の大きい順に75語挙げた（最小文書数1で設定）。それぞれ、単なる頻出語ではなく、データ全体に比べ、「成果」と「課題」において比較的高い確率で出現している言葉（語）であり、「成果」と「課題」を特徴づける言葉（語）（以下、「特徴語」とする）である。

1) 「成果」の特徴語

「成果」の名詞等には、学生が実習で学ぶ支援の実践者である「職員」という語や社会福祉施設での支援の対象となる「利用者」という言葉（語）が抽出された（表3）。次いで、学んでいる内容と思われる「生活」、「支援」、「施設」、「様子」、「理解」が抽出された。

「成果」の動詞には、「学ぶ」、「知る」、「出来る」や「分かる」が抽出された。「学ぶ」こと、「知る」ことが「出来」たと実感している様子が読み取れる。また、「関わる」、「見る」、「過ごす」などの具体的な行動を表す言葉（語）が抽出された。

2) 「課題」の特徴語

「課題」の名詞等には、「自分」が最も上位に抽出された（表4）。成果同様、人を表す語である。「関わり」、「言葉」、「言葉かけ」等、他者とのコミュニケーションに関する言葉（語）が抽出された。

「課題」の動詞は「聞く」、「教える」「話す」、「言う」等、名詞等と同様に他者とのコミュニケーションに関する動詞が抽出された。

上記の通り、抽出された特徴語から、「成果」としては、施設の生活の場に入り、子どもや利用者と共に過ごし、関わり、実際を見ることで、職員の支援の方法を学んだり、理解した様子がうかがえる。また、「課題」としては、利用児者に対する関わりや言葉かけなど、利用児者とのコミュニケーションについて課題と感じている様子がうかがえる。さらに抽出された言葉（語）

同士の関係性を見ていきたい。

表3.「成果」の特徴語

成果					
職員	.431	コミュニケーション	.122	活動	.073
学ぶ	.402	同士	.111	多く	.072
子ども	.397	観察	.110	取る	.070
生活	.315	家庭	.107	情報	.069
支援	.263	伝える	.107	合わせる	.069
知る	.260	環境	.105	安心	.069
利用者	.256	共有	.102	信頼	.068
施設	.253	障害	.094	経験	.068
見る	.244	学べる	.094	機会	.068
関わる	.239	役割	.094	他	.068
大切	.225	過ごす	.092	仕方	.065
行う	.204	それぞれ	.088	行く	.064
様子	.175	異なる	.087	入る	.064
様々	.175	気付く	.085	自身	.063
出来る	.161	入所	.085	変わる	.061
理解	.157	イメージ	.084	部屋	.061
分かる	.153	児童養護施設	.084	個別	.060
連携	.151	食事	.083	自立	.059
時間	.150	日々	.082	重要	.059
姿	.144	担当	.079	把握	.059
実際	.136	方々	.078	保育士	.059
気持ち	.130	場	.077	違う	.059
配慮	.129	実感	.077	今	.059
援助	.128	毎日	.075	内容	.059
関係	.123	楽しい	.074	働く	.056

数値はJaccardの類似性測度

表4.「課題」の特徴語

課題					
自分	.282	一緒	.080	不安	.054
実習	.250	目	.075	不足	.052
考える	.244	深める	.074	姿勢	.051
必要	.190	気	.074	心掛ける	.051
関わり	.180	保育	.073	学び	.050
難しい	.168	視野	.073	終わる	.050
持つ	.168	立場	.071	適切	.050
意識	.160	言う	.069	目標	.050
言葉	.155	距離	.069	考え	.049
言葉かけ	.146	注意	.069	改めて	.048
多い	.144	人	.067	発達	.048
積極	.142	繋がる	.064	自己	.044
児童	.139	今後	.064	広い	.044
行動	.128	作業	.064	興味	.043
知識	.120	課題	.061	違い	.043
聞く	.101	会話	.060	見守る	.043
教える	.099	大事	.058	行なう	.043
実習生	.098	力	.058	質問	.043
今回	.096	小学生	.057	戸惑う	.042
場面	.090	遊び	.056	細かい	.042
良い	.090	幼児	.056	受ける	.042
話す	.090	出る	.056	向ける	.042
前	.087	強い	.055	場合	.042
反省	.085	年齢	.055	足りる	.037
対応	.081	仕事	.054	後半	.037

数値はJaccardの類似性測度

3. 抽出語の共起ネットワーク分析

次に、「成果」と「課題」で記述された言葉（語）の関係性を明らかにするため、共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク図は、抽出語間の共起性を分析することができる。抽出語の出現回数は円の大きさに比例し、共起性は線で表現されている。共起ネットワーク図を描画するにあたり、描画する共起関係の絞り込みにおいては、描画数を60に設定した上で、最小スパニング・ツリーだけを描写するように設定した。

1)「成果」の抽出語の共起ネットワーク

「成果」の抽出語の共起ネットワークの分析により、41語が10グループに分けられた（図1）。それぞれのグループ化された言葉（語）の内容について、具体的な学生のリポートの記述と合わせてみていく。学生のリポートの記述には、分析対象の349記述にナンバーリングした記述番号と施設種別を示した。

①施設の生活環境への配慮に関する内容

グループ化された言葉（語）＜職員、子ども、生活、知る、施設、関わる、行う、配慮、環境＞

「…**職員**の方も家庭的な雰囲気の中で**子ども**が**生活**できるように一人一人の障害を見極め、一人一人に適した**環境**を整えるように配慮しており、こうした**職員の配慮**が**子ども**の姿につながっているのだと感じました（No.31、障害児入所施設）」

「**環境**構成についての**配慮**を学べたこと。実習先の**施設**では、1つのユニットに小学生から高校生までの男女8人が**生活**していました。幅広い年齢の**子ども**が**生活**を共にするため、高校生や受験生を一人部屋にしたり、**子ども**同士の相性を考慮したりして部屋割りを決めており、できるだけ過ごしやすいように工夫をしていることがわかりました。（No.147、児童養護施設）」

生活環境に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは「施設」の「生活」の場に入り、入所する「子ども」に対する「職員」の「関わる」方法や「環境」への「配慮」に対する理解を成果と感じていることを読み取ることができる。

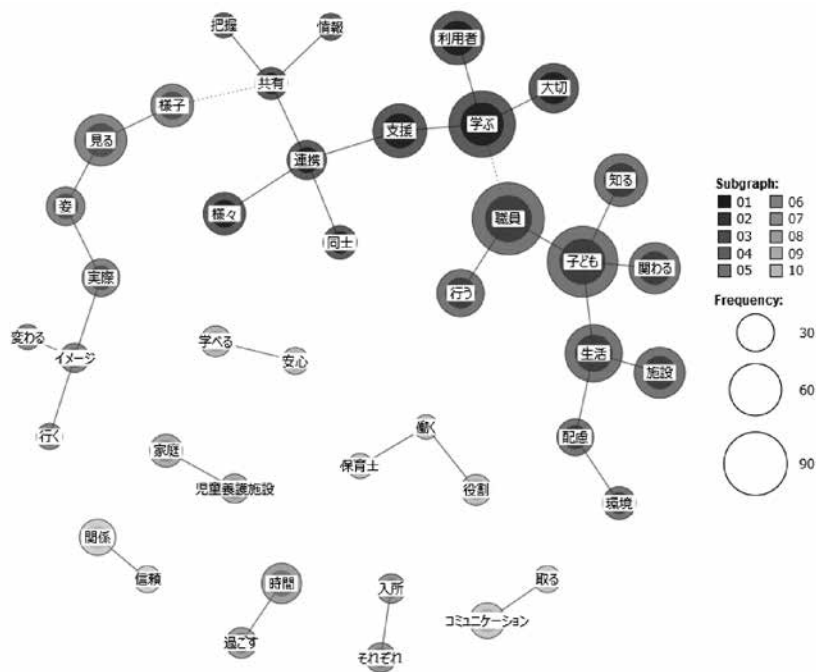


図1. 「成果」の抽出語の共起ネットワーク

②連携した支援に関する内容

グループ化された言葉（語）＜学ぶ、支援、利用者、大切、様々、連携、同士、共有、情報、把握＞

「職員の**利用者支援**の想いを学べた。**支援**は**利用者**の自立を第一に考えているため、**利用者**の思うとおりにならず、お互いに衝突することもある。そこで職員は**利用者**に対し「嫌い、難しい」で終わってしまってはいけない。例え**利用者**に嫌われていようとも**支援**を続けること。難しいときは職員で**連携**する。両思いでなくても両嫌いでなければよい。**利用者**のことを信じる心が、**支援**でとても**大切**だと**学んだ**。(No.68、母子生活支援施設)」

「職員の方同士の**連携・情報共有**の重要性を学ぶことが出来たこと。施設の中では介護士の方だけではなく、看護師・理学療法士・作業療法士・医師・事務員等の**様々な**役割の方が働いています。日々体調が変わる**利用者**の方々を一人一人**把握**し、逐一職員の方**同士**で**共有**していました…。(No.297、生活介護)」

連携、支援に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは「様々」な職種「同士」で「情報」を「共有」し、連携して「利用者」への「支援」を行うことの「大切」さについて「学んだことを成果と感じていることを読み取ることができる。

③事前のイメージと実際との違いに関する内容

グループ化された言葉（語）＜見る、様子、姿、実際、イメージ、行く、変わる＞

「…そこで生活する母子は“他とは違う”というマイナスな**イメージ**を抱いていました。実習を通して**実際**に母子が生活する**姿**を見ていると、母親も子どもも和気藹々とした楽しそうな**姿**があり、特に保育室、学童室で楽しそうに遊んでいる子どもの**姿**は、私が**イメージ**として持っている子どもの**姿**と何も**変わらない**ということに気が付くことができました。(No.126、母子生活支援施設)」

「障害者支援施設に対する**イメージ**が大きく**変わった**こと。実習に入らせて頂く以前まで、障害者支援施設に対して肯定的な**イメージ**が抱けず、少なからず不安な気持ちもありました。しかし、実習を通して**実際**に現場での**様子**を観察させて頂く中で、笑顔で職員の方々に話しかける利用者の方々やそれに応え明るく支援をする職員の方々の**姿**を見て、施設は明るくアットホームで素敵な場所であると感じることができました。(No.345、施設入所支援)」

イメージと実際に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは実習に「行く」前に抱いていた実習施設や利用児者に対する「イメージ」が「実際」の「姿」や「様子」を「見る」ことで「変わった」ことを成果として感じていることを読み取ることができる。

④保育士の役割に関する内容

グループ化された言葉（語）＜役割、保育士、働く＞

「多職種の仕事内容や連携、**保育士の役割**を学べたこと。施設には**保育士**以外にも看護師や理学療法士等、様々な職種の方が**働いて**いますが、職種によって利用者を見る点が異なり、多職種の方々が連携して関わることが、利用者のより良い生活に繋がっていると感じました。またその中で、**保育士の役割**は利用者の精神面のケアをしたり、生活をより豊かにするための活動を企画して行ったりしていることがわかりました。(No.277、障害児入所施設)」

働く保育士の役割に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは他職種と連携してそれぞれの専門性を発揮した支援を行うことで、社会福祉施設で「働く」「保育士」の「役割」を学んだことを成果と感じていることを記述から読み取ることができる。

⑤コミュニケーションに関する内容

グループ化された言葉（語）＜コミュニケーション、取る＞

「利用者との**コミュニケーションの取り方**を学ぶことが出来た。言葉だけで会話することが**コミュニケーション**の1つだと思っていましたが、…利用者と関わり気持ちを分かち合うことも**コミュニケーションを取る**ことなんだと理解が出来た。(No.301、生活介護)」

コミュニケーションに関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、利用児者と「コミュニケーション」を「取る」ことを通じて、言葉だけではない「コミュニケーション」の「取り」方を理解することができたことを成果と感じていることを記述から読み取ることができる。

⑥信頼関係に関する内容

グループ化された言葉（語）＜関係、信頼＞

「生活を共にする児童間に生まれる**関係性**や関わりについて理解出来たこと。男女混合・縦割りの室構成の中で、入所期間の長い児童同士は**信頼関係**が出来ており、仲良く話したり一緒に出かけたりする様子が見られた。…家庭における兄弟の**関係**とは異なり、自分のパーソナルスペースを守り、他児との適切な距離を保ちつつ生活していることが理解できた。(No.86、児童養護施設)」

「…子どもとの**信頼関係**を築くことができたのはもちろん、一人一人の発達状況について理解して関わりを持つことができるようになり、…。(No.255、障害発達支援)」

信頼関係に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、生活を共にすることによって、施設を利用している子ども同士のきょうだいとは違った「信頼」「関係」が見られたことや、実習生自身と利用者との「信頼」「関係」が築けたことを成果と感じていることを記述から読み取ることができる。

⑦安心に関する内容

グループ化された言葉（語）＜学べる、安心＞

「基本的な介助技術を学べたこと。初日に自分自身が介助を受ける体験をさせていただきました。その際に、排泄、更衣、食事等の日常生活の介助方法のポイント（なぜその方法なのかや注意点等）を細かく教えていただき、どのような介助は不安になるか、または安心するかという点を体感することができ、自分が介助する時に活かすことができました。…（No.276、障害児入所施設）」

安心に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、利用児者の安全、「安心」した生活のための支援について「学べた」ことが成果と感じていることを読み取ることができる。

⑧家庭に関する内容

グループ化された言葉（語）＜家庭、児童養護施設＞

「実際に家庭における問題点に触れ、子育て支援についてより深く考えることができた。職員の方から子どもの背景や、その子どもたちへの家庭復帰のための支援、自立に向けた支援について教えていただいたことで子育て支援のあり方や情報発信の仕方についてより深く考えることができた。児童養護施設は子どもへの支援だけでなく、子どもと保護者をつなぐための支援にも取り組んでいることが分かった。（No.48、児童養護施設）」
「…一人の児童を多くの目で見育てていくことができる点は、家庭にはない児童養護施設の利点であると感じた。（No.88、児童養護施設）」

家庭に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、児童養護施設の支援の特徴をとらえた「家庭」復帰のための支援や「家庭」養育とは違う施設養護の良さを感じたことを成果と感じていることを読み取ることができる。

⑨時間に関する内容

グループ化された言葉（語）＜時間、過ごす＞

「…子どもは多くの時間を共に過ごす中で、互いにどのような存在であるかを学ぶことができました。…経験を共に重ねていく存在であると感じました。…互いに刺激しあい成長しあえる存在であると感じました。また、子ども同士だからこそ話せることがあったり、余暇と一緒に楽しく過ごすことができたりなど、互いの支えになっているのだと感じました。（No.91、児童養護施設）」

時間に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、同じ「時間」を共に「過ごす」ための職員の工夫や実習生の利用児者への理解の促進、子ども同士のグループダイナミクスについて実感したことを成果と感じていることを読み取ることができる。

⑩多様な入所者や職種に関する内容

グループ化された言葉（語）＜それぞれ、入所＞

「…家庭ではない場所での生活をしている、様々な理由を抱えた子どもが頻繁に**入所退所**をする流動的な生活の中で、子どもと関わることは難しいことだ。その中で職員は、集団生活の中でのルールを考えること、大人として接することを前提とした中で、**それぞれ**が自分の個性を活かして子どもと関わっていた。…（No.23、一時保護施設）」

「…乳児院に**入所**している子どもは、家庭で養育できない何らかの理由が**それぞれ**あるので、一人一人に個別の専門的なケアが必要になってくる。…（No.82、乳児院）」

入所に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、「入所」する利用児者それぞれの背景に応じ、それぞれの専門性を発揮した支援について、知ることができたことを成果と感じていることを読み取ることができる。

2)「課題」の抽出語の共起ネットワーク

「課題」の抽出語の共起ネットワークの分析により、55語が11グループに分けられた（図2）。それぞれの組み合わせ内容について、具体的な学生のリポートの記述と合わせてみていく。

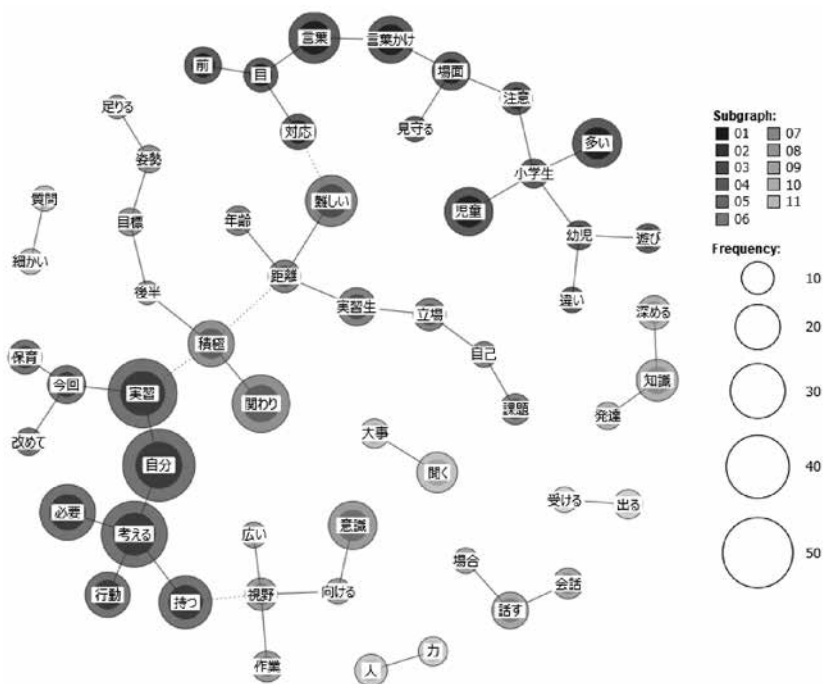


図2.「課題」の抽出語の共起ネットワーク

①実習生自身の保育観に関する内容

グループ化された言葉（語）＜自分、実習、考える、必要、持つ、行動、今回、保育、改めて＞

「自分の**保育観**を見直す。**今回の実習**でもう一つ印象に残っているのが、職員の方が子どもを叱っていなかったということだ。…叱らない**保育**を見て、**自分**は何を大切に子どもと関わるか、自分の**保育観**について**改めて**見直してみようと思った。(No.85、乳児院)」

「行為の理由をよく**考える**こと。利用者の方の**行動**・言動には意味があり、職員の方は日々よく観察して**考えて**支援をしていました。…表面上だけを見るのではなく、何故そうしているのか等、もっとよく**考える必要**があると感じました。(No.283、生活介護事業)」

保育や考えに関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、「今回」の「実習」で職員の関わりを観察することを通して、「改めて」「自分」の「保育」観を「考える」「必要性」を感じていることが読み取れる。

②積極的な姿勢に関する内容

グループ化された言葉（語）＜関わり、積極、姿勢、目標、足りる、後半＞

「すべての利用者と**積極的に関われなかった**。コミュニケーションをとることの難しさを今回の実習で感じ、日々の**目標**も**後半**は個別の**関わり**を工夫することに徹底して行ないました。…すべての利用者に合わせた**関わり**をするまでには至れませんでした。…会話もあくまでコミュニケーションの一手段でありそれができないからといって諦めずに**積極的に関わろうとする姿勢**をもっと見せていれば、すべての利用者が心を開いてくれたのではないかと思います。(No.254、障害児入所施設)」

積極性や姿勢に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、実習が進むにつれて「後半」は個別の「関わり」を工夫する等、日々の「目標」を工夫する姿がうかがえる。また、利用児者に対する「関わり」についての「積極」的な「姿勢」の「足りなさ」が課題だと感じていることが読み取れる。

③利用児者との距離感に関する内容

グループ化された言葉（語）＜難しい、実習生、立場、距離、課題、年齢、自己＞

「…学童とは**年齢**が近いこともあり、仲良くなるとどうしても友達のような関係になってしまった。原因は、私が学童との**距離**を縮めすぎてしまったことにあると考える。…**実習生**という**難しい立場**ではあるが、状況を見ながら自分の立ち位置を考えなければならないと感じた。（No.109、一時保護施設）」

「…子どもとの関わりにおいて**距離感**を意識しすぎて、受身になってしまった結果、こちらから積極的に関わることができなかった。…こちらから働きかけないと心を開いてはくれない。という指導を受け、積極的に自分から関わりに行くという**自己課題**に気付かされた。（No.125、児童養護施設）」

距離感に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、「実習生」という「立場」について「難しさ」を感じている様子がうかがえる。特に利用児者との適切な「距離」感が分からず、近くなりすぎたことや、逆に意識して受け身の姿勢として指導を受けたことで、課題だと感じていることが読み取れる。

④利用児者への対応に関する内容

グループ化された言葉（語）＜言葉、言葉かけ、多い、児童、場面、前、対応、目、注意、小学生、遊び、幼児、見守る、違い＞

「子どもの年齢や性別での関わり方の**違い**。**小学生**以上の子どもに対してと**幼児**に対しての関わり方には**違い**があると学んだ。…**幼児**に対する場合と同じように**小学生**以上の子どもに接してしまうことや…接し方への**注意**が必要であると学んだ。（No.19、一時保護施設）」

「**注意の言葉かけ**の仕方が難しかったこと。**目**の前で危険な行為やしてはいけないことをしている**場面**に遭遇した際、ただ**注意**するだけでなくどうしてその行為をしてはいけないのかをきちんと説明し、子どもが理解できる言葉で伝えなくてはいけない…子どもに伝える際には簡単な言葉で伝えられるような言葉選びを行ったり、その時の子どもの姿に適した環境を整えたりすることが大切であるということを学ぶことができた。（No.80、児童養護施設）」

対応、関わりに関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、「小学生」との関わり方への戸惑いや具体的な「場面」における「言葉かけ」の際の「言葉」の選び方について、「幼児」との「対応」の「違い」について意識したことを課題だと感じていることが読み取れる。

⑤視野に関する内容

グループ化された言葉（語）＜意識、視野、作業、広い、向ける＞

「**視野**を**広く**持って子どもと関わるができなかったこと。目の前にいる子どもと関わることにだけに集中してしまい周りにいる子どもへ目を**向ける**ことができず、表情や秘めている思いに気がつくことができないことが多くあった。次回の実習では関わっている子どもだけでなく周りにいる子ども一人一人にも目を**向けられる**ようにし、一人一人が持つ思いに寄り添うことができるように**視野**を広く持って子どもと関わるができるように**意識**をしながら実習に臨みたいと思いました。（No.35、障害児入所施設）」

視野に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、実習中に目の前の利用児者に目を「向ける」だけではなく、「視野」を「広く」持つことを「意識」することや、考え方としての「視野」や将来を見通した「視野」の必要性について気付いたことが自身の課題だと感じていることが読み取れる。

⑥発達の知識に関する内容

グループ化された言葉（語）＜知識、深める、発達＞

「**発達**に関する**知識**をさらに**深める**こと。なぜこの学園に通っているのか、2週間の中でわからない子どもの姿もあったため、療育を必要とする子どもの特徴など自分の中の**知識**を増やしていきたいと思います。（No.259、児童発達支援）」

発達に関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、「発達」に関する「知識」を「深める」ことの必要性を実感し、課題だと感じていることが読み取れる。

⑦コミュニケーションに関する内容

グループ化された言葉（語）＜話す、会話、場合＞

「…比較的**会話**のできる方とのコミュニケーションは取れるようになった。しかし、**話す**ことが困難な利用者の意思を汲み取ることはまだ難しかった。そんな時、職員は利用者の目をよく見て、目と目で**会話**をしているようだった。意思を伝える術は言葉だけではないということを頭に入れておきたい。（No.40、生活介護事業）」

コミュニケーションに関する言葉（語）がグループ化された。学生の記述からは、「会話」やコミュニケーションの手段が「話す」ことだけではないことを感じたことで、言葉を用いないコミュニケーションについて課題だと感じていることが読み取れる。

⑧その他

グループ化された言葉（語）＜聞く、大事＞＜出る、受ける＞＜人、力＞＜質問、細かい＞

これらの4種類の組み合わせに該当する学生のレポートの記述から、この抽出語の特徴をとら

えることができなかった。従って学生の記述から「課題」とグループ化された主な内容は、前述の7項目であった。

3) 学生ごとの「成果と課題」

共起ネットワーク図の描画により、「成果」の内容として、10項目、「課題」の内容として7項目、確認することができた。文書検索機能により抽出された語を含む記述を検索し、学生の記述と成果①～⑩、課題①～⑦との対応表を作成した(表5)。

「成果」で比較的多く記述されていた内容は、実際に福祉現場に身を置くことで理解される内容（成果①施設の生活環境への配慮、③事前のイメージと実際との違い、⑤コミュニケーション）であった。また、保育者養成で行われる実習との違いから特徴的だと思われる、社会福祉施設で働く職員に関する内容（成果②連携した支援、④保育士の役割）であった。「課題」で比較的多く記述されていた内容は、自身の保育観に関する内容（課題①実習生自身の保育観）や利用児者に対する態度や姿勢（課題②積極的な姿勢、④利用児者への対応）、実習生としての立ち位置や視野に関する内容（課題③利用児者との距離感、⑤視野）であった。

一方で、記述として見られない内

表5. 学生と対応させた成果と課題の内容

通し 番号	実習 種別	成果										課題						
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	1					○												
1	3								○								○	
2	1					○						○						
2	3	○															○	
3	1		○			○	○											○
3	3		○			○			○									
4	1	○											○		○			
4	3			○														
5	1	○					○				○	○						
5	3	○	○		○			○					○	○				
6	1			○									○					
6	3	○					○											
7	1	○		○			○							○		○		
7	3		○				○		○						○			
8	1		○	○	○		○											○
8	3	○						○			○	○						
9	1			○	○												○	
9	3		○				○		○				○				○	
10	1																	
10	3								○			○						
11	1					○									○			
11	3	○	○			○											○	
12	1				○		○									○		
12	3				○		○		○				○					
13	1			○										○				
13	3																	○
14	1		○													○		
14	3					○									○			
15	1			○										○				
15	3	○	○										○	○				
16	1						○					○	○					
16	3		○										○					
17	1						○			○					○		○	
17	3		○	○					○	○		○						○
18	1			○														
18	3											○		○				
19	1		○															
19	3									○				○	○			
20	1			○			○							○				
20	3					○								○				
21	1				○	○		○					○					
21	3	○	○							○			○					
22	1											○						
22	3					○								○				
23	1		○							○				○				
23	3															○		
24	1		○									○			○			
24	3	○			○		○	○	○						○			○
25	1		○		○	○							○					
25	3	○	○											○				
26	1					○												
26	3		○								○							
27	1														○	○		
27	3				○					○	○		○		○			
28	1		○															
28	3		○															
29	1			○		○							○					
29	3	○							○									
30	1																	
30	3									○					○			
31	1	○																
31	3					○												
32	1	○					○			○		○		○				
32	3		○										○					
33	1											○						
33	3		○	○		○			○									
34	1																	○
34	3				○				○				○	○				
35	1		○	○														
35	3					○												
計		15	23	13	10	15	13	4	9	9	5	11	14	13	12	4	7	5

容は、支援に関する技術や計画に関わる内容である。学生が学んでいる支援は実際には、計画に基づいて行われており、意図や専門的技術によって支援を行っている。今回の分析においては抽出されず、学生にとっては意識しにくい部分だと考えられる。

Ⅳ. おわりに

本調査の目的は、社会福祉施設での実習によって、学生がどのような学びを成果として感じて、どのような課題を感じているかを明らかにすることであった。結果から、学生が実習の成果として実感していたことは、①施設の生活環境に関する内容、②連携した支援に関する内容、③事前のイメージと実際との違いに関する内容、④保育士の役割に関する内容、⑤コミュニケーションに関する内容、⑥信頼関係に関する内容、⑦安心に関する内容、⑧家庭に関する内容、⑨時間に関する内容、⑩多様な入所者や職種に関する内容10項目であった。学生が実習の課題として実感していたことは、①実習生自身の保育観に関する内容、②積極的な姿勢に関する内容、③利用児者との距離感に関する内容、④利用児者への対応に関する内容、⑤視野に関する内容、⑥発達の知識に関する内容、⑦コミュニケーションに関する内容7項目であった。

今回、明らかになった学生にとって学びとりやすい成果となる内容や課題となる内容について、傾向を精査し、保育実習基準に示される学ぶべき内容との比較を行い、実習指導の指導内容の検討を行う必要があるだろう。

今回は調査対象者が少ないため、偏りがあると考えている。今後の検討課題を以下に挙げる。

1. 学生の学びに応じた実習指導の在り方、2. 保育所の実習との学びの違い、3. 社会福祉施設での実習の順序による学びの違い、4. 施設種別による学びの違い。

引用参考文献

- 圓入智仁（2007）施設保育士養成カリキュラム開発に関する研究 平成18年度総括研究報告書、厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
- 越中康治・高田淑子・木下英俊・安藤明伸・高橋潔・田幡憲一・岡正明・石澤公明（2015）テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析－共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み－、宮城教育大学情報処理センター研究紀要、第22号、pp.67－74
- 福田明・栗栖照雄・渡邊一平・横山奈緒枝（2018）介護実習指導者の「自信のなさ」に関する要因と改善に向けた課題の研究－面接調査結果のテキストマイニングによる分析を通して－、最新社会福祉学研究、第13号、pp.1－13
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析、ナカニシヤ出版
- 加藤美帆（2016）実習中のつまずきと実践力を高める効果的な実習指導に関する一考察－保育実習Ⅱの振り返りから－、広島女学院大学幼児教育心理学科研究紀要、第2号、pp.31－36
- 厚生労働省（2018）指定保育士養成施設指定基準、構成労働省雇用均等・児童家庭局長通知（子発0427第3号）

指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について

- 三浦和美・渡会純一（2017）大学1年時から教育現場に入る「教育実践活動Ⅰ」の成果と課題－共起ネットワークの分析を通して－、東北福祉大学教職研究、2016、pp.171－188
- 大嶋恭二（2009）保育サービスの質に関する調査研究 平成20年度総括研究報告書、厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
- 鈴木秀樹・庄司幸恵・板垣恵子・林圭子、小野八千代（2015）看護学生の早期体験実習における教育評価（1）、東北文化学園大学看護学科紀要、第4巻第1号、pp.59－71
- 高畑芳美・名須川知子、磯野久美子（2018）0・1・2歳児の主体的な遊びの変容と親の関わり－子育て支援ルームにおける親子のエピソード分析から－、保育学研究、第56巻第3号、pp.161－173
- 高梨未紀（2018）生活施設におけるソーシャルワーク実習生の学びの視点－テキストマイニングによる実習日誌の分析から－、日本福祉大学社会福祉論集、第138号、pp.117－130
- 山崎美貴子（2017）指定保育士養成施設種別ごとの保育士となる資格取得者の就職状況、第7回保育士養成課程検討会資料

（ひろいゆういち 國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）